

林田は、電話番号案内サービスに電話をかけるため、受話器を上げた。

「はい、一〇四の島崎です」

「もしもし、広島市内のヒルトンホテルの電話番号をお願いします」

「かしこまりました。ヒルトンホテルをご案内いたします。ありがとうございます」

電話番号の案内が流れてくると、林田は素早くメモにとり、ヒルトンホテルに電話した。

「はい、ヒルトンホテルでございます」

「お忙しいところすみません。宿泊料金についてお聞きしたいのですが」

「それではフロントにおつなぎいたしますので、お待ち下さいませ」

「お待ちせいたしました。フロントでございます」

「少々お尋ねいたしますが、そちらのシングルとツインルームの宿泊料金について知りたいんです」

「はい。シングルが一万八千円、ツインが二万三千円でどちらも朝食付でございます」

予算より少し高いが仕方がないと思った林田は、

「そうですか。ではシングルの予約をお願いします。明日、三月三十日は空いてますか？」

「申し訳ございません。あいにく、明日はシングルが満室となっております。ツインでしたら一部屋ご用意できますが」

林田は一瞬ためらったが、「ではツインでお願いします」と答えた。

「ありがとうございます。では、宿泊される方のお名前とお電話番号をどうぞ」

「はい、清水食品の藤本貞男です。電話番号は横浜〇四五―三三一―八三三八です」

「承知致しました。では、清水食品の藤本貞男様で、明日三月三十日のご一泊でツインルームのご予約を承りました。私、フロントの保坂と申しますので」

「あ、私は、清水食品の林田と申します。それではよろしくお願いします」

受話器を置いて一息ついたとたん、林田のダイレクトインが鳴った。

「はい、清水食品の林田です」

「もしもし、藤本です」藤本は林田と同じ課の先輩である。

「お疲れさまです。今、ちょうど藤本さんの携帯に電話を入れようと思っていたんですよ」

「いいタイミングだな。で、明日の広島出張の件だけど、ホテルの予約は済んだ？」

「はい、たった今。でもご希望のセンチュリーホテル広島は満室で取れませんでした。その付近でいろいろ探しましたがやっぱりほとんどが満室で、結局、ヒルトンホテルになりました。少し予算オーバーの二万三千円のツインですけどいいですか？」

「ああ、いいよ。ありがとうございます。秘書の福山さんが休暇中だから、林田君に頼んでしまつて悪かったね。今度、昼飯でもおごるよ。じゃあ、僕は今日はこの後、品川のヘンリーフーズ社を訪問してそのまま帰るから」

「わかりました。では失礼します」

電話を切って腕時計を見るともう三時半。林田はホテルの予約騒動で中断していた報告書の作成に再び取りかかると、キーボードの上で指を走らせた。